

3 町の現状

(1) 地勢

本町は、千葉県の北部、利根川流域に位置し、東は成田市、西は印西市、南は印旛沼、北は利根川をはさんで茨城県に接しています。東京都心から45km圏に入り、千葉市からは35kmの距離で、日本の表玄関成田空港へは10kmのところの位置しています。総面積は32.46km²で、東西に約12km、南北に約5kmと東西に細長く、東部は一帯に高台で山林や畑が多く、南部及び西北部は平坦で豊かな水田地帯が広がっています。東部の台地上の役場周辺など一部の地域は、住宅地として開発されています。



(2) 沿革

本町は、紀元前からすでに丘陵地を中心に集落が形成され、その跡に貝塚が残っており、多くの石器や土器が出土しています。また、奈良時代前期には龍角寺地区を中心として豪族が勢力を示し、その墓と伝えられる岩屋古墳（国指定史跡）など 110 余基の古墳群が点在し、その歴史のおもかげを今日に伝えています。江戸時代には、江戸と東北方面からの物資の流通を河川に依存していたことから、中継基地や宿場町として大変なにぎわいをみせたといわれています。

近代に入り、明治 22 年に、安食村、北辺田村、龍角寺村、酒直村、矢口村、須賀村及び麻生村の 7 村と安食ト杭新田飛地が合併して境村となり、また、布鎌請方新田他 15 村が合併して布鎌村となりました。さらに、境村は、明治 25 年には安食町と改称し、昭和 29 年に豊住村（現在成田市）の一部を編入しました。そして、翌年の昭和 30 年 12 月 1 日には、安食町と布鎌村が合併し栄町が誕生しました。その後、昭和 31 年には、茨城県出津地区を編入しています。

昭和 47 年には、「水と緑の田園観光都市」構想の策定による新たな施策の展開と成田線の電化によって、東京への通勤圏となりました。昭和 57 年以降は、安食台、竜角寺台、酒直台、南ヶ丘など民間事業者による大規模宅地開発が行われ、小中学校が相次いで開校したほか、「水と緑の運動広場」（平成 2 年）や「ふれあいプラザさかえ」（平成 6 年）などスポーツ・文化施設も整備され、平成 8 年には人口が 2 万 6 千人を突破しました。

産業面では、稲作を中心とした農業が長く基幹産業として本町の経済を支えてきましたが、平成 4 年には、矢口地区において、日本初のスーパー堤防整備事業と、これと一体となって進められてきた工業団地の土地区画整理事業が竣工し、日本を代表する食品製造会社などが立地しました。また、観光拠点としては、平成 4 年にオープンした「千葉県立房総のむら」が平成 16 年に体験博物館としてリニューアルスタートし、平成 14 年にはその隣接地に「栄町総合交流拠点ドラムの里」を開設しました。この間、県道成田安食線バイパス（平成 4 年）、国道 356 号バイパス（平成 11 年）、県道美浦栄線若草大橋（平成 18 年）が開通し、産業面、生活面における利便性が高まりました。

紀元前にまで及び歴史を持つ本町は、昭和 30 年の合併以降、人口、産業、観光、交通など、様々な面においてめざましい発展を遂げ、現在に至っています。



(3)人口

国勢調査の結果をみると、総人口は、昭和55年の約1万人から急速な増加をみせ、平成2年に22,493人と2万人の大台を超えたのち、平成7年のピーク時には25,615人となりましたが、その後人口は減少に転じ、平成22年には22,580人となっています。

年齢別に、0～14歳の年少人口、15～64歳の生産年齢人口及び65歳以上の老年人口をみると、年少人口は、平成2年をピークに一貫して減少傾向にあり、生産年齢人口は、平成12年までは増加していましたが、平成17年には減少に転じました。また、老年人口は、一貫して増加しており、平成2年から平成22年までの20年間で約2.2倍に増加しています。

生産年齢人口の減少は、昭和57年以降の大規模宅地開発の際に入居した世代の子どもたちの多くが、就学・就業・結婚などを機に、町外に転出することが主な原因とみられます。

■ 総人口の推移

